総合医学会報告

2023年シンポジウム：薬剤師が取り組む周術期

何ができる？周術期薬剤師！
－業務実態とニーズに関するアンケート調査から見えた今後への期待－

内野達宏[1)2)†] 稲垣雄一[2)] 伊東正樹[2)]
座光寺伸幸[2)] 竹内正紀[2)]

第77回国立病院総合医学会
2023年10月21日　於　広島

IRYO　Vol. 78　No. 4（239－244）2024

要旨　周術期薬物療法への薬剤師介入は，病院運営における強いニーズとなっている．2022年度診療報酬改定においては，質の高い周術期医療が行われるよう手術室の薬剤師が病棟の薬剤師と薬学的管理を連携して実施した場合の評価として，周術期薬剤管理加算が新設された．さらに，質の高い疼痛管理による患者の疼痛スコアの減弱，生活の質の向上および合併症予防などを目的として術後疼痛管理チーム加算も新設された．静岡医療センターでは，2022年9月より周術期薬剤業務を開始したため，周術期薬剤師の業務実態を把握し，周術期における薬剤師業務のニーズに関するアンケート調査を行った．その結果，本取り組みの導入前と比べ，手術室薬剤業務時間・周術期薬剤管理加算件数・術後疼痛管理チーム加算件数は増加した．周術期薬剤師の処方提案受入率は85.2%で，内訳は「鎮痛薬」「内服薬の再開」が上位を占めた．提案受入率は過去の報告と比較しても高いか同程度であることから周術期薬剤師による介入は有用であると考えられた．本調査結果より，タスク・シフトを行い他職種の業務負担軽減に繋がったことが高く評価されていた．他職種より評価された内容としては対物関係の事柄が多かった．対人関係の事柄については薬剤師へ期待する業務として挙げられた．薬剤師の実施している業務に対しては，周術期薬剤師記録を残すことで術前から術後まで薬剤師の介入が病院全体に周知されていることも明らかになった．薬剤師が手術室の医薬品管理を徹底することで，請求漏れ減少にも寄与できる可能性がある．また，薬剤師の場所と役割を確保したことにより，他職種から見て薬剤師が気軽に相談できる近い存在となり，心理的安全性も高くなったと考えられた．今後の展望として，対人業務を拡大することで，手術患者の安全性確保と周術期医療の質の向上のために周術期にかかわる職種と連携を図り，リスク因子の情報を共有することで周術期リスク管理システムが構築されることを期待する．

キーワード　周術期薬物療法，薬剤師，アンケート調査，タスク・シフト，医薬品管理

1）国立病院機構静岡てんかん神経医療センター　薬剤部　2）国立病院機構静岡医療センター　薬剤部　†薬剤師
著者連絡先：内野達宏　国立病院機構静岡てんかん神経医療センター　薬剤部
〒420-8688　静岡県静岡市葵区漆山886
e-mail：uchino.tatsuhiro.sh@mail.hosp.go.jp
（2024年2月20日受付　2024年4月19日受理）

What Can Perioperative Clinical Pharmacists Do?: Future Expectations Revealed by a Survey on Actual Conditions of Perioperative Tasks and Needs for Pharmacists

Tatsuhiro Uchino[1)2)], Yuichi Inagaki[2)], Masaki Ito[2)], Nobuyuki Zakoji[2)], and Masaki Takeuchi[2)]
1）NHO Shizuoka Epilepsy Neurological Medical Center
2）NHO Shizuoka Medical Center
(Received Feb. 20, 2024, Accepted Apr. 19, 2024)
Key Words：perioperative medicine care, pharmacist, questionnaire survey, task shifting, pharmaceutical management